



新たな命の息吹

以前にトラが亡くなった話を書きましたが、今回は明るい話題を。タイトル通り今動物園はベビーラッシュです。

まずはワオキツネザル。サル仲間でも原始的な猿といわれる原猿類に属し尻尾が輪状の模様をしていることからこの名前が付けられました。平成20年は2頭が生まれ現在順調に育っています。最初はお母さんの胸にしがみついていたのですが、今はもう展示室内をチョロチョロかけ回っています。私は何となくこのワオちゃん、デン助劇場の大宮デン助に似ていると思うのですが（古い人しかわかりませんね）。



次はフンボルトペンギン。ペンギンというイメージがありますが、こちらはペルーからチリにかけての南アメリカ沿岸に分布する種類で比較的飼育しやすいことから日本でも多くの動物園や水族館で見ることができます。ちなみに、ペンギンは南半球だけに生息するもので、よくホッキョクグマとペンギンと一緒に描かれている絵を見かけますが間違った構図です。平成20年3月24日に卵からかえり、今は親がいったん胃で消化したものをもどし口移しで餌をもらっています。まだ羽は茶色のうぶ毛状のものですが体重は2.2キログラムあります（成鳥で4から5キログラムぐらい）。まだお客さんの前には姿を見せていませんが近々お目見えするでしょう。



そしてアカカンガルー。こちらはまだ誕生はしていません。というのもお母さんの袋に入っているからです。カンガルーなどの有袋類は袋から出て地上におりた日を生まれた日としています。ですから袋がモゾモゾ動いているのを確認するぐらいしかできませんが、運がよければそのうち顔を覗かせるのが見られるでしょう。



このほかにも何種類かの動物が生まれたりしていますが、動物園としては公表の時期をいつにするかいつも考えさせられます。一刻も早く皆さんに見てもらいたいと思う気持ちと今発表して大丈夫だろうかという不安が一緒くたになるからです。

動物の場合生まれても生存の確率は人間ほど高くありません。それは生まれた個体の状況というだけでなく、生んでも親がまったく面倒を見なかったり面倒を見ても間違ったことをしたり、親につぶされたり、またマンガースやカワウソといった食肉目の動物などは生んだ仔を食べてしまうことなどもあるからです。海を泳ぐペンギンなども大人の羽になる前に巢

箱から出て誤ってプールに落ちたりすると溺死することもあります。カラスにやられてしまう場合もあります。もちろん飼育環境も整っている動物園ですから野生よりは生存率は高いと思いますが、小さな命にとって回りは危険ばかりなのです。

ここまで書いてきてショッキングなニュースが飛び込んできました。ここからさほど遠くない水戸市の千波湖でハクチョウやコクチョウなど7羽が何者かに撲殺されたというのです。先日もチューリップの花が切り取られる事件が報道されましたが、このような何の抵抗もできない動物や植物たちの生命をためらいなく（としか思えない）絶つ行為には、驚愕という表現以上に激しい怒りと戦慄すら覚えます。動物園には傷ついた野生の動物たちがよく持ち込まれます。そうした彼らを何とか助けてあげようと獣医たちが手当てをして野生にもどしてあげます。そのような傷病動物や生まれた動物の赤ちゃんたちが懸命に生きようとしている姿に日々接している我々としては本当に言葉も出ない事件なのです。

冒頭、明るい話題で進めようと思ったのですがまたこのような結果となってしまいました。しかし、このような殺伐とした事件が多いからこそ、小さな命が一生懸命育まれていく姿を大人の方もお子さんも是非動物園でご覧になって頂きたいと思います。

なお、ペンギンの赤ちゃんだけはまだ皆さんの前には姿を見せないかと思っておりますのでご了承願います。

平成20年4月29日 園長 生江信孝

2008年4月29日

過去の一覧

[令和6年](#)

[令和5年](#)

[令和4年](#)

[令和3年](#)

[令和2年](#)

[令和元年](#)

[平成30年](#)